恋愛小説のつくりかた

小林深雪

小林深雪（こばやし・みゆき）
1964年3月10日生まれ。うお座のA型。
武蔵野美術大学デザイン科卒業。
少女のための小説を書いたり、
雑誌に音楽の記事を書いたり、
アイドルの写真集にコピーを書いたりしてい
ます。

講談社X文庫

teen's ♥ heart

恋愛小説のつくりかた

小林深雪

●

1993年1月5日　第1刷発行
1993年2月25日　第2刷発行
定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本———株式会社国宝社
カバー印刷—半七写真印刷工業株式会社
デザイン—山口　馨
©小林深雪　1993　Printed in Japan
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-198725-9　(文4)

講談社X文庫

恋愛小説のつくりかた

小林深雪

CONTENTS

恋愛小説のつくりかた…… 5

ただいま恋愛小説執筆中!……8
架空のボーイフレンド……37
名案が思いつかない!……67
双子の小悪魔……94
絶体絶命! この世の終わり……106
サンタクロースの正体……136
クリスマス・パーティー……159
恋愛小説のつくりかた……175

特別付録『少女小説家になる方法』……185
はじめに……186
Lesson1　小説の書き方のコツ、教えます……188
Lesson2　原稿の書き方、教えます……200
Lesson3　原稿の売り込み方……204
Lesson4　その他の質問や疑問にお答えします‥209

あとがき……216
ガールフレンドになりたい!!……220

恋愛小説のつくりかた

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

恋愛小説のつくりかた

今度のデートは、花屋さんに連れていって。
そして、わたしに花束をプレゼントしてね。
白いチューリップ。ピンクのガーベラ。
赤いアンセリウム。黄色いひまわり。
わたしの好きな花。
あなたは覚えていてくれてるかしら？
わたしの好きな花を花束にして。
そして、わたしに贈ってほしいの。
そのときは、白いリボンも忘れずにつけてね。
そしたら、わたし――。
次のデートには、その白いリボンを髪に結んでいくわ。
そしたら、真っ先に気づいてね。
そして、言ってね。
――とってもよく似合うよ――って。

ただいま恋愛小説執筆中！

「芽衣。大傑作は、もう書きはじめたの？」

朝の食卓。

パパが新聞越しに、わたしに微笑みながら、そう聞いた。

「うん。バッチリ」

わたしは、カリカリに焼いたトーストにバターを塗りながら返事する。

「おねーちゃん。バター取って」

弟の礼央が、わたしたちの会話を横から邪魔する。

「ちょっと待ってよ」

「おねえちゃーん。わたしには、マーマレード取って」
今度は、妹の理央だ。
「もー、ゆっくり、パパと話くらいさせてよ」
わたしは、双子のチビを横目で軽く睨んだ。

12月も始まったばかりの朝。
庭からは、小鳥の鳴き声が聴こえてくる。
窓から差し込む、朝の白い光。
キッチンからは、コーヒーの香り。
ママは、キッチンで5人ぶんのベーコンや卵を焼くのに、大忙し。

「おねえちゃあん。わたし、ココアが飲みたい」
「ぼくは、ホット・ミルク！」
「自分でつくんなさいッ！」

そう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宮永家の朝は。
いつも。
こんなふうに、慌ただしく始まる――。

宮永家は、5人家族。
パパとママ。
そして。
わたしと双子の弟と妹。

パパは、貿易会社に勤めているサラリーマン。
痩せていて背が高い。
髪には、多少、白いものが混じりはじめてる。
でも。
気持ちは若くて。
いつも、冗談ばっかり言って、家族を笑わせている。
そして、のんびりした、気のいい性格。

家族のなかでは、わたしはパパといちばん気があって仲よし。
ママは、専業主婦。
ショート・カットで活動的。
パパとは正反対の性格で、いつも、せわしなく動きまわってて、早口。
フラワー・アレンジメントとか英会話とか、習いごとをいっぱいしてて。
子供には、けっこう口うるさい教育ママ。
でも、双子たちは、成績優秀だから。
いつも、怒られるのは、わたしだけなんだけどね。
そして、わたしの下には、小学3年生の双子の弟と妹。
男のコのほうが、礼央。
女のコのほうが、理央って名前。
ふたりは、二卵性の双子で。
名前同様、顔も、ほんとによく似ている。
髪が短いほうが礼央で。
いつも、おしゃまに、髪にリボンをつけてるのが理央。
くりっとした大きくて可愛らしい目をしていて。

まあ、一見、天使みたいに愛らしい。
誰もが、礼央と理央を見ると言うよ。
「あらぁ。お人形さんみたいに可愛い双子ちゃんね」
って。
でも、その可愛い外見にだまされちゃーいけない。
そう。
この双子は、とんでもない、くわせモンなの。
わたしの生活を脅かす、とんでもない小悪魔たち。
わたしのいちばんの悩みのタネ。

そして。
わたしは、都内の私立女子高校に通う高校1年生。
16歳。
フルネーム、宮永芽衣。

元気がよくて明るいって、みんなには、よく言われる。
趣味は、映画を見ること。
成績は、まぁ、中の上っていったところ。

「芽衣、それで、原稿は、どれくらいすすんだ？」

パパが、新聞を脇にどけて。
焼きあがったばかりのベーコン・エッグにフォークを入れながら。
わたしに聞く。
隣で、まだ、「ココア！」とか「ミルク！」とか「ママぁ。わたし、ベーコン・エッグより、ゆで卵のほうがいい！」とか、ぎゃあぎゃあ騒いでる双子たちを無視して、わたしは答えた。

「今、原稿用紙30枚くらいかな」
「それが書きあがったら、新人賞に応募するんだろ？」
「うん」

「締め切りは、いつなの？」
「来年の3月いっぱい。だから、まだ、ちょっと時間はあるんだ」
「芽衣の夢は小説家だもんな。パパは、応援してるよ」
ニッコリ、パパが微笑む。
「うん。パパ！　ありがと」

そう。
うちのパパって、ほんと、理解があるんだぁ。
パパ、大好き♡

「芽衣なら、大丈夫だよ。とびきりの大傑作が書けるはずだよ」
「えへへ。そうかなぁ」
「うん。パパの娘だもん」
「あはは。それって、親バカかも。でも、パパも昔は、小説家になりたかったんでしょ？」
「そう。結局、夢はかなわず、今は、こうして、普通の会社員だけどね」
「でも、まだ、遅くないよぉ。パパもまた、書けばいいじゃない？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com